

## 質的心理学が切り開く地平 — 日本質的心理学会設立集会「シンポジウム」

大谷 尚 名古屋大学 Takashi Otani Nagoya University  
無藤 隆 お茶の水女子大学, 白梅学園短期大学 Takashi Muto Ochanomizu University;  
Shiraume Gakuen College  
サトウタツヤ 立命館大学 Tatsuya Sato Ritsumeikan University

### 要約

本論文は日本質的心理学会設立記念集会におけるシンポジウム「質的心理学が切り開く地平」の誌上再録版であり、3人の話題提供者の発言が収録されている。大谷は教育工学の立場、無藤は保育研究の立場、サトウは心理学史研究の立場、をそれぞれ前提としながら、各人の研究と質的研究のあり方について検討を行い方法論や技法についての提案を行った。大谷は「質的アプローチは研究に何をもたらすか」というタイトルで話し、従来扱えなかった新たな研究テーマや研究分野の創造とそれによって研究の拡張と発展ができるのではないかと、とした。無藤は「質的研究から現場を変革し、学界を開いていく」というタイトルで話し、質的研究をすることが研究者と実践者との関係、研究の場と実践の場の関係、狭い心理学と他の学問との関係をつくり変えていきやすいのではないかと主張した。サトウは「質的心理学は心理学以外を排除するための名称ではない」というタイトルで話し、学会設立の意義を科学社会学の視点から検討した。以上、質的研究、特に質的心理学という名称に固執するのではなく、量的研究との差異化や融合、様々な分野の融合、現場における様々なアクターの融合、ということが目指されるべきであると総括できる。

### キーワード

研究倫理, 認識論, 現場, 質的研究, 日本質的心理学会, 学融

### Title

**Toward New Research Trends from the Perspectives of Qualitative Methods: Symposium.**

### Abstract

Three panelists in the Preparatory Symposium of the Foundation of the Japanese Association of Qualitative Psychology (JAQP) presented their views on future perspectives of qualitative research as well as on the new association JAQP. Otani's lecture from the perspective of educational technology was entitled, "What contributions do qualitative approaches make to new research?" After giving a brief lecture on qualitative methodology, he emphasized that qualitative methods lead to new research paradigms that have not been previously explored, leading to the extension and development of research. Muto gave a lecture entitled, "Qualitative research has changed research in the field and will reform the academic world.", about his own research career and future perspectives for qualitative psychology. His view is that research based on qualitative methods will promote positive relationships between researchers and practitioners in psychology and other research disciplines. In the lecture, "The association's name includes the word "psychology" which doesn't imply the exclusion of non-psychological research or researchers". Sato spoke about the implications of the foundation of this new association on qualitative methods from the perspective of the history of psychology as well as the sociology of science. The new association hopes to provide an arena for all researchers who wish to carry out research in all disciplines, thereby creating a fusion of disciplines, or in other words to conduct trans-disciplinary studies.

### Key words

qualitative method, field, the Japanese Association of Qualitative Psychology (JAQP), trans-disciplinary.

## 1 序

本論文は2004年03月20日(土)にお茶の水女子大学で行われた日本質的心理学会設立集会におけるシンポジウム「質的心理学が切り開く地平」の誌上再録版である。当日のプログラムは下記のものであった。

### 【話題提供】

大谷尚(名古屋大学)・・・質的アプローチは研究に何をもたらすか

無藤隆(お茶の水女子大学)・・・質的研究から現場を変革し、学界を開いていく

サトウタツヤ(立命館大学)・・・「質的心理学」は心理学以外を排除するための名称ではない

### 【指定討論】

戈木クレイグヒル滋子(東京都立保健科学大学・看護学)

茂呂雄二(筑波大学・心理学)

好井裕明(筑波大学・社会学)

### 【司会】

尾見康博(山梨大学)

本稿は話題提供者の3名が自分の発言をもとに補筆を施すなどしてそれぞれの部分を改稿し、その後に論文としての体裁を整えたものである。本稿は論文としてはやや特殊な形であるが全体として一つの論文となるように心がけた。

## 2 質的アプローチは研究に何をもたらすか

— 大谷尚(名古屋大学)

### 1 はじめに

本シンポジウムのタイトルは「質的心理学研究が切り開く地平」である、しかし筆者は心理学者ではなく、

教育学をバックグラウンドとして、主にテクノロジーの教育利用を研究している。

質的研究に関心を持ったのは1990年頃である。名古屋大学に1989年に来る前は、コンピュータを使って授業研究をしていたが、実際にコンピュータが学校に入ってくると、学校にそれまでなかった「異物」が入ることになるので、さまざまな出来事が生じる。そこで起きることを研究すると、これまで見えなかった、学校教育の潜在的で本質的な特性が見えてくる。それを分析する手法を必要としたのだが、それまでの授業研究には、授業の逐語記録をとって分析する方法か、あるいは、「発問」や「応答」などの教師と子どもの外見の行動カテゴリーで分析するカテゴリー分析の方法しかなかった。しかし子どもがコンピュータに向かって勉強している時、子どもは何も発言しないので、逐語記録を作成しようとしても一文字も書けない。また、ひとりひとりがおとなしく座って学習するので、外見の行動カテゴリーもない。これは何とかして別の方法で分析したいと考えていたところに「質的研究」というものがあるとわかり1991年～1992年に、トロント大学でコンピュータの教育利用を質的な手法で研究しているロナルド・G・ラグズデイル(Ronald G. Ragsdale)教授らのグループに参加して、手法の獲得に努めた。

帰国して質的手法で研究を進め、1995年に「日本教育工学雑誌」(日本教育工学会誌)に「質的研究」という語をタイトルに含む論文(大谷, 1995a)を初めて書いた。また、学会大会では研究手法に関するパネルディスカッションで質的研究の提案を行った(大谷, 1995b)。その時のパネルディスカッションのメンバーは、筆者以外は必ずしも質的研究者ではなかったが、このメンバーを最初のメンバーとして質的研究のメーリングリストを開設した。これを現在は公開で運用し、メンバーもあらゆる分野から300名以上が参加しており、2004年で10年になる。そのような背景で述べる。

筆者は話題提供として、質的研究とは何かについて、以下に、「2. 質的研究の枠組み」、「3. 質的研究の手続き」、「4. 分析の過程で重要な点」、「5. 量的手法と質的手法の関係」、「6. 質的アプローチが研究にもたらすもの」という観点から述べる。なお、質的研究は

研究者の数だけあるとさえ言える。学会としては、それを今後、学会員の中でどういうふうにも共有していくかが問題となると思われるが、少なくとも以下はすべて「筆者の考える」質的研究である。また、以下の内容の目的は、質的研究について外観して頂き、後の議論の基礎とすることであるから、必ずしも一般に了解が得られていないかもしれないことも、議論のきっかけとして、あえて提示する。

## 2 質的研究の枠組み

### (1) 質的研究とは何か

ぼくがこんなふうに、B-612 番の星の話をして、その番号まで持ち出すというのも、じつは、おとなの人たちがよくないからです。おとなというものは数字がすきです。新しくできた友だちの話をする時、おとなの人はかんじかなめのことはききません。「どんな声の人？」とか、「どんな遊びが好き？」とか、「蝶の採集をする人？」とかいうようなことは、てんできかずに「その人、いくつ？」「きょうだいは、何人いますか？」「目方はどのくらい？」、「おとうさんは、どのくらいお金をとっていますか」とかいうようなことを、きくのです。そしてやっと、どんな人か、わかったつもりになるのです。

これは有名なサン・テグジュペリの『星の王子さま』の一節である（サン＝テグジュペリ・内藤訳，1962）。これを読んでも、私たちは、日常的な対人認知においてさえ、いかに「量」に頼っているかということがわかるのではないかと思う。

そこで質的研究とは何かだが、それはひとことでは、**「研究対象を数や量においてではなく、質において理解すること」**である。ただし同時に、「それを十分な科学性を有した方法で行う」ことである。

### (2) 今日の意味での質的研究

ところで、研究は、量的な研究でなければすべて質的研究である、というわけではない。すべての研究を大きく質的なものと量的なものに分けるとすると、歴史学、文学、哲学、教育学などは量的ではないが、質

的研究とは言わない。では今日の意味での質的研究とは何かといえば、「非計量的 non-numerical」で「脱実証的 post-positivist」で「経験科学的 empirical」なものであると考えている。

### (3) 質的研究の特徴

そしてそのような質的研究の特徴は、次のとおりである。

- ・一定の仮説枠による仮説検証を目的としていない。  
(ただし、「仮説」という言葉を使わないというわけではない)
- ・実験的研究状況を設定しない
- ・観察や面接を重視し言語記録を作成する
- ・その際、研究者の主観を排さない
- ・主に記録（質的データ）に基づいて分析する
- ・上の記録以外の得られる資料（文書や人工物）も総合して検討する
- ・研究対象の具体性や個別性に即して分析する
- ・問題を社会・文化的な文脈で扱う
- ・現象に内在する意味を見いだす

### (4) 質的研究の多様な思想的系譜と手法的系譜

また質的研究には多様な思想的系譜と手法的系譜がある。思想的系譜としては、現象学、解釈学、現象学的社会学、エコロジー、フェミニズム、批判理論、グラウンディッド・セオリー・アプローチ（これは手法的系譜のひとつでもある）、社会的構成主義、認知心理学（とくに状況論や社会文化的アプローチ）、ネオ・マルキシズム、ポストモダニズムなどがある。

手法的系譜としては、解釈学的手法、現象学的手法、自然主義的手法、構成主義的手法、脱実証主義的手法などがある。

具体的には民族誌学（エスノグラフィー）、エスノメソドロジー、グラウンディッド・セオリー・アプローチ等の手法が含まれ、全体として、社会科学におけるパラダイムシフトを少なからず志向しているのではないかと考えられる。

このような質的研究の全体像 whole picture を描くことは誰にとっても非常に難しいと思われるが、ウォルコット (Wolcott, 1992) は、「教育研究における質的

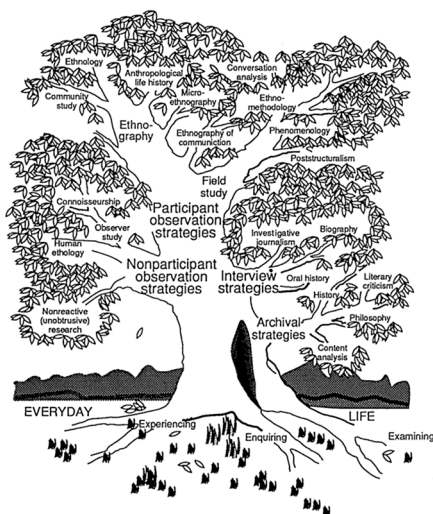


図1 教育研究における質的方略 (Wolcot (1992). Qualitative Strategies in Educational Research, Miles & Huberman (1994)より)。

方略「Qualitative Strategies in Educational Research」という、質的研究全体を一つの樹で表現した大変興味深い図を示している(図1)。

この図では、質的研究という木は「日常生活 EVERYDAY LIFE」という土地の上にある。その木は、その土地の中に「体験すること Experiencing」、「問うこと Enquiring」、「検証すること Examining」という根を伸ばし、その上に「非参加観察法 Nonparticipant observation strategy」「参加観察法 Participant observation strategy」という幹が伸びていて、上の方は「エスノグラフィ ethnography」などとなっている。また幹の下の方からも、「文書研究法 Archival strategy」「面接法 Interview strategy」などが伸びている。

なお、質的研究全体に共通する重要な点は、日常生活という土地に体験、問い、検証という根を伸ばしている、この根の張り方であろう。

### 3 質的研究の手続き

#### (1) データ採取とデータ作成

質的研究の実際の手続きは、データ採取とデータ作成、データの分析、理論化と分けられると思うが、質的研究でのデータ採取は、参加観察 (participant observation)、非参加観察 (non-participant observation)、非構造化面接 (unstructured interview)、半構造化面接 (semi-structured interview)、非形式的面接 (informal interview)、フォーカスグループ・インタビュー (focus group interview) などによって行われる。

観察記録や面接記録は、成形してデータとするために、さらに文章化するので、それをデータ作成(記録)ということができると思う。その際、観察者の主観も排除せず、積極的に記録する。データは言語記録を中心としたものになり「質的データ qualitative data」と呼ばれる。

## (2) データの分析と理論化

データの分析は、基本的には専門的な知見を背景に、その記録を丹念に読み込んでいくことで行われるが、次のような手法も用いられる。

## (3) コード化と理論的コード化

その一つは「コード化 coding と理論的コード化 theoretical coding」という手法で、理論的コード化はグラウンディッド・セオリー・アプローチ grounded theory approach の方法であるため、その影響を受けてないところでは全くコード化をしない分析も行われているが、この手法によれば、まずオープンコード化 open coding として、思いつくコードをつけていく。この段階でのコードは、具体的、事象的である。

それを理論化するためにコードを付した事象の背景、次元（これを筆者は縦横高さの広がりとして説明することがある）を検討する。こうして選択的コード化 selective coding の段階に進む。ここではより構造的、抽象的、包括的、概念的、理論的なコードへと段階を上げて、理論浮上 theory emergence を導くようにする。

## (4) 質的データ分析

もう一つの手法は「質的データ分析 qualitative data analysis」で、質的データを変換、縮約 compress、表示 display して分析していく方法であり、「質的マトリックス qualitative matrix」「意味ネットワーク semantic network,」「因果ネットワーク causal network」などの方法がある。これはいまだにあまり日本では利用されていないが、量的研究との間に親和性があり、量的研究者にも比較的理解されやすいと思われる。筆者は教育工学会という実証的で非文系的なソサエティで質的研究をしてきたので、質的研究は、これまでの教育学と親和性があるということを示すことを重要だと考え、質的データ分析にポイントをおくこともあり、これが量的アプローチにおける統計的手法に相当するものであると、量的研究者に説明している。

これを用いた例として、たとえば図2と図3は、コンピュータを用いた授業でのトラブルが何に起因するかを明かにするために用いた質的マトリクスであり、最初に作成した図(図2)では傾向が把握できないが、

それをさまざまな観点からソートしたところ(図3)、トラブルの多い少ないは、教師の経験ではなく、コンピュータの利用の形態によって規定されることが明らかになった例である。

また図4は、因果ネットワークの例である。(以上の図は、大谷(1997)から。)このような図は、分析ができた時に結論を表示するために使用するのではなく、こういうものを操作しながら分析を行う。つまりこれは、結論の表示のためのツールではなく、むしろ分析のためのツールである。マイルズ&ヒューバーマン(Miles & Huberman, 1994)にはさまざまな手法が紹介されており、タイポロジーが書かれているが、さまざまなケース、さまざまなアプローチで分かれていて、統計学における手法と同じように、目的に応じた体系化を試みている。したがって、これらの中から有効に活用できるものを選べる可能性もある。

## (5) 研究手続き全体の流れ

質的研究の手続きを「データ採取とデータ作成」、「データの分析」、「理論記述」と述べたが、この3つはつねに一方に流れるわけではないことに注意する必要がある。

一般に仮説-検証型の研究では、いったん仮説を立てたらデータ採取→分析→検証と一方に流れる。検証に失敗したら、ふりだしに戻って仮説を立て直す。

それに対して質的研究は(図5参照)、データを採取しながら分析する。データが足りなければさらに採取する。そして分析しながら理論記述 theory writing を行う。理論記述がうまくできなければ、また分析する。その際、データが足りないと判断したら、また採取する。このように、循環を続ける。質的研究の根本問題『Critical Issues in Qualitative Research』(Morse, 1994)という本には、研究計画がきちんと定まらなくて助成金の申請をしにくいということまで書いてある。このように、質的研究は、本質的には、研究のどの部分を何ヶ月、どの部分を何ヶ月と、決められない側面を有している。研究助成金の申請などでは、期間内にきちっとできるように書く必要があり、たしかに難しい面もある。さらに問題なのは、質的手法で修士論文の研究に取り組むような場合、期間内にうまく書けないということがあり得ることである。その意味では、

授業 記号	学 年	学 級	コン ピュ ータ の利 用形 態	授 業 者 記 号	教 職 年 数	本 校 勤 務 年 数	コン ピュ ータ 経 験 年 数	指示・説明等学習指 導上の問題	頻 度	学習規律・統 制上の問題	頻 度	ハード、ソフト 関連のトラ ブル	頻 度	授業のその他の特徴
A	5	2	CAI	KH	2	2	2	・教材研究不足	1	—	0	—	—	—
B	3	3	LOGO	MY	#	#	4	・板書ミス ・不適切な作業中断 ・入力方法誤指示 ・セーブ方法誤指示 ・セーブ時間不足	5	・子どもの姿勢 ・立ち歩き ・フロッピーで遊ぶ	3	—	0	—
C	3	1	LOGO	KR	4	4	4	・ソフト操作法不理解 ・不徹底な演示	2	・椅子を回す ・椅子に寝そべる	2	・送出トラブル	1	—
D	6	1	CAI	KK	#	#	14	・入力指示不足	1	・立ち歩き ・ブラインドいたずら ・重複質問	3	・送出トラブル ・コースウェアのバグ	2	・分数入力キーの説明に、多くの時間を割く
E	4	2	CAI	KK	#	#	14	—	0	—	0	—	0	—
F	5	3	CAI	TK	#	2	2	・誤った指示	1	・重複質問	1	—	0	—
G	2	2	CAI	KR	5	5	5	・メッセージ誤解	1	・騒がしき	1	・送出ミス ・コースウェアのバグ	2	—
H	2	1	CAI	IY	#	2	2	・操作法不理解	1	・立ち歩き ・椅子の上に立つ	2	・送出トラブル ・マシントラブル ・コースウェアのバグ	3	・コースウェアにバグ。教師は隣の学級に相談に出る。
I	3	2	LOGO	KK	#	#	14	・セーブの演示とフロッピーの配布の順序が逆 ・ヴァージョン違いによる指示間違い ・授業延長	4	・椅子を回す ・椅子の上に乗って回る ・椅子から転落	3	—	0	・教師HMの学級でのT.T. KKが主、HMが補助。
J	3	1	LOGO	KK	#	#	14	・指示外活動 ・説明不足	2	—	0	—	0	・SKの学級でのT.T. KKが主、SKが補助。
K	2	2	LOGO	KR	5	5	5	・指示の混乱 ・リターン忘れ ・問題解決不能	—	・指示を見ない ・立ち歩き	2	—	0	—

図2 授業実施順マトリクス

授業 記号	学 年	学 級	コン ピュ タの 利用 形態	授 業 者 記 号	教 職 年 数	本 校 勤 務 年 数	コン ピュ タ 経 験 年 数	指示・説明等学習指 導上の問題	頻 度	学習規律・統 制上の問題	頻 度	ハード、ソフ ト関連のトラ ブル	頻 度	授業のその他の特徴
B	3	3	LOGO	MY	#	4	4	・板書ミス ・不適切な作業中断 ・入力方法誤指示 ・セーブ方法誤指示 ・セーブ時間不足	5	・子どもの姿勢 ・立ち歩き ・フロッピーで遊ぶ	3	—	0	—
C	3	1	LOGO	KR	4	4	4	・ソフト操作法不理解 ・不徹底な演示	2	・椅子を回す ・椅子に寝そべる	2	・送出トラブル	—	—
I	3	2	LOGO	KK	#	#	14	・セーブの演示とフロッピーの配布の順序が逆 ・ヴァージョン違いによる指示間違い ・授業延長	4	・椅子を回す ・椅子の上で回る ・椅子から転落	3	—	0	・教師Hの学級でのT.T. KKが主、Hが補助。
J	3	1	LOGO	KK	#	#	14	・指示外活動 ・説明不足	—	—	—	—	0	・SKの学級でのT.T. KKが主、SKが補助。
K	2	2	LOGO	KR	5	5	5	・指示の混乱 ・リターン忘れ ・問題解決不能	2	・指示を見ない ・立ち歩き	—	—	0	—
A	5	2	CAI	KH	2	2	2	・教材研究不足	1	—	—	—	—	—
D	6	1	CAI	KK	#	#	14	・入力指示不足	1	・立ち歩き ・ブラインドいたずら ・重複質問	3	・送出トラブル ・コースウェアのバグ	2	・分数入力キーの説明に、多くの時間を割く
E	4	2	CAI	KK	#	#	14	—	—	—	—	—	0	休みの教師Tの学級での代理授業
F	5	3	CAI	TK	#	2	2	・誤った指示	1	・重複質問	—	—	—	—
G	2	2	CAI	KR	5	5	5	・メッセージ誤解	1	・騒がしさ	1	・送出ミス ・コースウェアのバグ	—	—
H	2	1	CAI	IY	#	2	2	・操作法不理解	1	・立ち歩き ・椅子の上で立つ	2	・送出トラブル ・マシントラブル ・コースウェアのバグ	3	・コースウェアにバグ。教師は隣の学級に相談に出る。

図3 授業形態別マトリクス

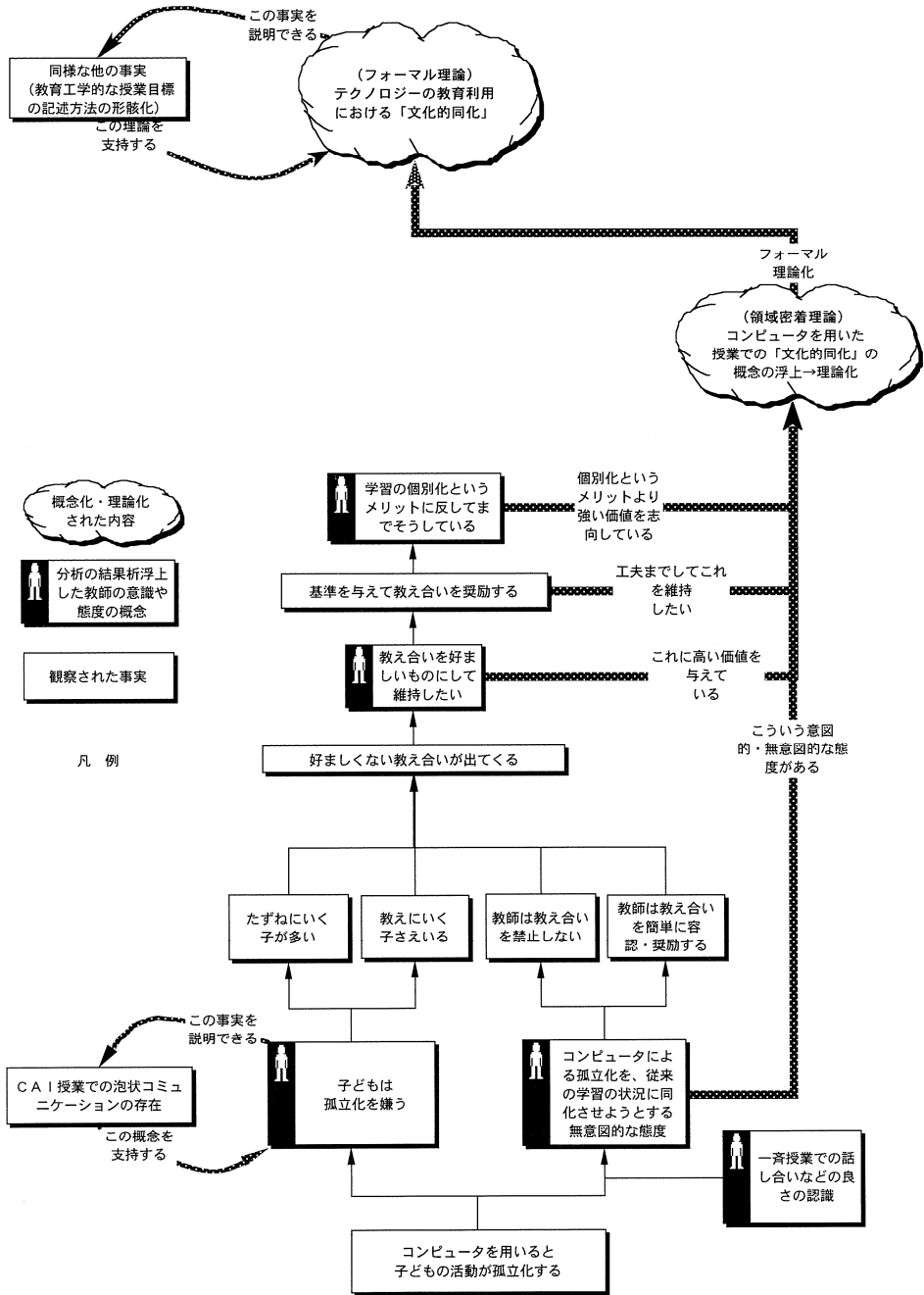


図4 因果ネットワークの例



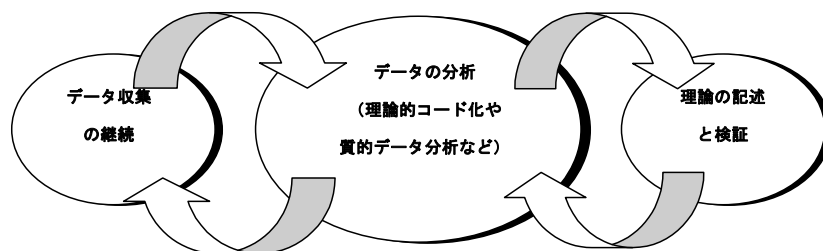


図5 質的研究の手続き

つまり時間との関係で、危険性のある手法だとも言える。

#### 4 分析の過程で重要な点

##### (1) 研究者の自己省察性 (reflectivity)

ツールつまり道具というものは一般に、使い手がその特性をよく把握する必要があるし、必要に応じて研いだり、測定器具なら較正 (キャリブレーション) をしたりする必要がある。ところで、質的研究における最大の研究ツールは研究者自身である。そうであれば、そういったことを、研究者が自分自身に対してやっておかななくてはならない。そのためにはまず、自分はなぜこのテーマを研究しようとしているのかということ、根本的な背景をよく考えて、人との対話において明らかにすることが有効である。たとえば、家族について研究したいと思っている場合、それは自分の育った家族が不幸だと感じていたからなのか、幸福だと感じていたからなのか、自己省察して自覚しておかなくてはならない。自覚していないと、そのような背景が研究に影響を与えていても、それに気づかない。逆に、そういった背景に気づけば、その影響を排除することができるかもしれないし、完全に排除できなくても、分析の要因のひとつとして組み込むことが可能になる。

##### (2) プロセスの明示 (explication)

一般に、ある研究に反論する際には、結論だけに対して反論することはできない。反証可能性という言葉でも表されるように、どういう手続きを経たからこう

なったのだというふうに、手続きを明示しておいてはじめて、「この手続きのここ間違いがあるから結論がおかしいのではないか」と反論できる。質的研究でもこの反証可能性が重要であり、そのために研究のすべてのプロセスを明示する必要がある。そしてそれは、研究論文の査読者や読者のためではなく、まずだいいちに著者つまり研究者自身のために、いいかえれば研究を良いものにするために必要なのである。

##### (3) 十分な引用 (citation)

本シンポジウムに先立つ対談で、「旅行記」とか「感想」ということばが、きちんとした研究とは異なるものとして出ていたが、恣意的、独善的な解釈に陥らず、解釈の妥当性を高めるために、十分な引用が必要である。優れた質的研究の本を読むと、著者がひとこと述べる前に、必ず数本の論文の引用がある。そういう論文を書きたいものだとか常々考えている。

##### (4) 質的研究と研究倫理

表1にもとづいて述べると、旧来の考え方だと、研究対象となる人々は真理について無自覚な人である。かれらは、研究「対象」という意味で object と呼ばれてきたし、同時に、研究「主題」という意味で subject とも呼ばれてきた。研究者は高度で専門的な知識を有している特権的な存在と見なされてきており、研究によって、長い目で見れば社会に利益を還元するということを前提に、研究対象の人々に直接に結果を返す必要があるとは考えられて来なかった。また、社会の進歩に貢献していくことで、社会的敬意を受けるものと

表1 質的研究における研究者と研究対象との関係

	旧来の考え方	今日の考え方
研究対象の人々	事実や真理に無自覚な人 「研究対象 (object)」とも「研究主題 (subject)」とも呼ばれてきた。	研究の目的と意義を理解して主体的に参加するボランティアとしての「 <u>研究参加者 (participant)</u> 」
研究者	高度で専門的な知識・技術を有する <u>特権的な存在</u>	研究参加者とともに研究をデザインする <u>コーディネーター</u>
両者の関係と研究の貢献	研究は人々や社会に長期的かつ間接的に貢献するありがたいもの。研究者は社会的敬意を受ける。	両者はともに主体的で、平等かつ互恵的な関係。成果は求められれば研究参加者に還元する。

されて来た。

それに対して、今日では考え方がさうとう変わってきている。これは量的な研究でも同様であるが、質的研究ではとくに、研究対象となる人々の生活など、かれらの社会的な営みに深くかかわるので、研究倫理がいつそう問題になる。質的研究に関する研究書が、ほぼ必ず研究倫理のことに触れていることに気づくだろう。

今日の考え方では、これまで「研究対象」と呼ばれてきた人たちは、研究の目的と意義を理解して、それに主体的に参加するボランティアであって、「研究参加者」と呼ばれる。近年の英語で書かれた論文では subject とか object という呼び方はほとんどなく、research participant と記述されている。そしてそこでの研究者は、研究参加者とともに研究をデザインするコーディネーターである。この両者はともに主体的で平等かつ互恵的 mutually beneficial な関係であって、研究成果は、求められればすぐにでも研究参加者に還元する。

## 5 量的手法と質的手法の関係

### (1) 量的研究と質的研究における「仮説」の意味の違い

心理学のように量的手法が支配的であるソサエティでは、このことはとくに問題になると思われるため、はっきりさせておくべきだと考えるが、量的研究と質的研究においては「仮説」の意味が違ふと考えるべきである。質的研究でも「仮説」という概念を使うこと

はあるが、それは、データと照合しながら常に変化させて発展させていくような「動的かつ微分的」なものであり、量的研究で用いられる、いったん立てたら検証するまで変更してはいけないような仮説ではない。

(なお、筆者は「作業仮説」ということばは用いない。これは、量的研究でも使うことばであり、多少の混乱を生じているからである。)

### (2) 研究の背景としての認識論の違い

インタビューに際しては、「話し手 (インタビューー) は語るべきものをすでに持っているのだから、聞き手 (インタビュアー) はできるだけ中立な立場でそれを引き出す」というのが従来の考え方であろう。しかし今日の質的研究ではそう考えられていない。話し手は、聞き手を自分にとってどういう人間であると認識するかによって話す内容を変える。そればかりでなく、初対面の場合には、むしろどういう人間なのかを探りながら話したり、探るために話したりさえする。したがって、そこに生じるインタビュー結果は、話し手と聞き手の関係性の中で「生起」したものであって、以前から実在しているものではない。同様な観点から、Handbook of Qualitative Research Second Edition では、インタビューを、negotiated text (相互交渉により生み出されたテキスト) とさえ呼んでいる (Fontana & Fray, 2000)。

このことを認識論でいえば、前者の以前からの考え方が「客観的実在論」であるのに対して、後者の考え方は、社会的構成主義、相互行為論、状況論に基づく認識論であると言える。

### (3) 量的手法と質的手法の親和性

量的手法も質的手法も、観念的、規範的な研究ではなく、対象に対して観察や面接を行ってデータを採取し、それを分析する点が共通である。筆者は empirical ということばは「実証的」と訳さず「経験科学的」と訳し、「実証的」という訳は positivist の訳としてのみ使うが、質的研究は、positivist ではないが、きわめて empirical である。その点で、量的手法と質的手法の間には深い親和性があると考えている。量的手法と質的主法の間には親和性がある以上、これを併用することが考えられるし、実際に行われている。それは、mixed mode, between method, multi method, cross paradigm 等と呼ばれている。

### (4) 量的手法と質的手法の研究的役割の違い

ただし量的手法と質的手法にはその応用に適した固有の研究的問題があると考えられる。具体的なテーマを例にとると、非行に対するアプローチがよく例としてあげられる。

量的アプローチでは年度ごとの非行の種別、関わった子どもの年齢や性別を比較して傾向を分析する。それに対して質的アプローチでは、そもそもある時代には、どのようなことをすると非行と見なされるのかという「非行のラベリング」の問題が扱われる。たとえば、今日の子供高生のように化粧をアクセサリーを付けていれば、筆者が高生時代の時代であれば非行少女である。このように何が非行なのかというラベリングは、社会文化的背景によって変わる。そういうものを「意味」として見ていくのが質的手法だと言える。だから、質的研究は、社会文化的な仕組みを扱うものだというふうに言うのだが、シンポジウムに先立つ対談の中でやまだようこ氏が「連環」と述べ、大橋氏が「意味」と述べたものも、それも筆者のことばだと、まさに「社会文化的な側面」だといえよう。

### (5) 質的手法でないといけない問題(研究課題)とはどのようなものか

ここで、ある例について考えて頂きたい。たとえば、ある人が野外教育のために、森に入った時の安全に関する指導を計画している。しかし危険にあった時の行動には国によって固有の性質があるらしい。たとえば、

母親が子どもを連れて森を歩いている時に、熊に出会ったら、日本の母親なら子どもを抱えてうずくまる。それに対して欧米の母親は、子どもの前に熊の方を向いて立ちはだかると言われている。(これは、もと京都大学教授で、後に国際日本文化研究センター教授をつとめられた会田雄二氏の命題である。会田、1972)。実際に筆者も、名古屋大学のすぐ隣の、留学生の子どもがたくさん在籍していて、PTA 会長が外国人である小学校の PTA 主催の会で、この話をして、参加者に、自分だったらどうするかとたずねたところ、まず、日本人の母親が「たしかに子どもを抱えてうずくまるだろう」と答えたのに対して、欧米の母親は「そんなことをして何になる。母子ともに殺されてしまうではないか。当然、子どもの前に立つ」と答えた。日本の母親も欧米の母親もお互いにはじめてそれを聞いたせいもあり、相手の言うことが信じられない様子だった。)

そこでこれについて研究することにする。研究の目的は2つ設定する。

- a. これが正しいかどうかを明らかにする。
- b. そのような違いがあった場合、その違いは何に基づくのかを明らかにする。

これを量的手法で解こうとするなら、サンプルを集めてアンケートを実施したらいいと考えるだろう。子どもを連れていて森で熊に会った日本の母親と欧米の母親をたくさん集めて、そのなかからさらに無作為抽出でそれぞれ日本と欧米 100 人ずつにアンケートを実施する…

それができないなら、心理学が伝統的に用いてきた実験的研究状況の設定を行う。つまり、実験的に研究する。たとえば、日本の母親と欧米の母親に 100 人ずつに協力依頼し、子どもを連れて森を歩いてもらい、そこへ飼い慣らした危険のない熊を放す…

しかしこのような実験に使える熊がいなければ、しかたがないので、研究者が熊の着ぐるみを着て出て行って脅かす…

以上、(講演では、これを聞きながら多くの方が大笑いしておられたように) これらは不可能であることが明白だと思う。最後の方法は不可能ではないかもし

れないが、有効であるとは思えないし研究倫理的にも問題がある。百歩譲って仮にうまくできたとしても、これで分かるのはaだけであって、bは分からない。

そもそもこのような問題の背景には、死生観などの文化の問題がある。たとえば、日本では、「一緒に死ぬ」ということに対して、多少好意的にとらえる傾向があるのではないか。だとしたら、これは文化依存の問題として、質的手法で解くべきであり、そこでは、以下の手法を採用できる可能性がある。

#### ・子を持つ母に対する面接調査（個別インタビューやフォーカスグループ・インタビュー）

具体的には、熊以外の危険に関する同様のケース、たとえば交通上の危険、遊具での危険、暴漢などのケースについて面接調査を行う。あるいは「子どもを失うことがあったらどうか?」「自分が死んだら子どもはどうなるか?」等の面接調査を行う。

#### ・母子に対する観察調査

動物園で、交差点等で、公園の遊具で、病院の待合室で...

#### ・母子関係に関する伝統的な態度や価値観の表れている昔話や文献等の調査

神話、聖書、イソップ、グリム童話、古事記、風土記、日本書紀、伝説、都市伝説...

#### ・母子が描かれている絵画、彫刻などの分析（これは人工物・工芸物分析 artifact analysis になる。）

## 6 質的アプローチが研究にもたらすもの

### （1）研究者が両アプローチを学ぶことで研究を豊かにできる

筆者は、質的研究者は量的研究手法を絶対に学ばなければいけないと考えている。母集団と標本、測定、尺度、測定信頼性と妥当性、推測統計と記述統計、検定、仮説の棄却と採択など、データを集めるとはどのようなことなのか、集めたデータからものを言うとはどのようなことなのか、そのときに気を付けなければならないことはどのようなことなのか、などの問題は、量的・質的を問わずに研究に共通に存在する問題や課題であって、量的研究の伝統を学ぶことで、データを採

取し、そこからものを言うことの難しさ、深さ、厳しさ、そして楽しさを理解しておく必要があると考えているからである。

また、今日は、量的研究者も質的アプローチを学ぶべき時代だと考える。「自分は、観察や面接もするが、量的研究者だからそこでは、見て聞いて記録すればよい」という時代ではない。質的データの分析の手法が多様に開発され実績を上げているにも関わらず、アンケートの自由記述の分析については、単純な考え方や稚拙な方法でなされている量的研究の論文を実に多く見かける。観察や面接における相互行為的な意味とは何か、ナラティブとは何か、質的データの有効な分析はできるかなどを学ぶとともに、トライアングレーション、質的研究の研究倫理、研究知見の一般化可能性の問題などについても学ぶべきだと考える。

量的研究者がこのようにして採用できるのは、「質的研究の研究手法」、「質的研究の認識論」、「質的研究のパラダイムやデザイン」、の3つであると考えている。

教育や医療など実践的ヒューマンサービスにおける研究では、科学的であるべきとともに、技術的方法、手続きをとって対象と直接に接しているため、その対象の満足が重視される。つまり、客観性と主観性、一般性と個別性という、相反する要件を同時に満たすことが求められるのが実践的ヒューマンサービスの実践やその研究である。しかし「客観性と主観性」「一般性と個別性」の間の問題こそ、質的研究が、量的研究との拮抗の歴史の中で取り組んできた問題である。そういう意味でも質的研究が有効であると考えている。

### （2）混ぜるな危険！——安易な併用の危険性

ただし量的手法と質的手法は基本的に認識論が違うため、とにかく両方やればよいというものではない。質的と量的の違いは、単に着目する現象の側面だけではない。先述のように、量的手法と質的手法は認識論において異なっているのである。

したがって、安易な混用は良い結果を生じない。安易にこの二つを混ぜると危険である（筆者は、「混ぜるな危険」と言っている。）

なお、最近、別の意味で安易に両手法を用いた論文がたくさんある。たとえば、全体に量的アプローチだが、グラウンディッド・セオリー・アプローチの本を

1冊だけ引用して「この研究では、質的手法も併用しており、自由記述の分析をグラウンディッド・セオリーで行った。」などといたもかんたんに書いてあり、分析を見ると、ただ類型化しているだけだというようなものがある。このような論文は、危険にさえ至らないようなものだが、質的手法が認知され、「併用」が流行になることで問題も生じてきている例である。

### (3) 質的研究が研究にもたらすもの

以上をふまえ、この課題への答えを以下のようにまとめることができると考える。

- 1 従来からの問題や課題のために新たな科学的研究手法を獲得あるいは提供できる。
- 2 それだけでなく従来扱えなかった新たな研究テーマや研究分野の創造と、それによる研究の拡張と発展が期待できる。
- 3 両手法の間で混乱と対立が起こると予測される。安易な質的研究の氾濫や、それに付随する問題が出てきて、難しい状況になる可能性があると考えられる。そしてこのことは、本学会に固有で本質的な問題となるので、今後、さまざまな取り組みが必要になると考えられる。

**3 質的研究から現場を変革し、学界を開いていく**  
 — 無藤 隆  
 (お茶の水女子大学、現白梅学園短期大学)

この数年間を振り返ってみた時、「質的心理学研究」という雑誌の編集を行ってきた中で、実際に達成できたことというより、そこで目指してきたところのものを取り出してみたい。私自身は質的研究への関心はあるが、自分自身が中心になって関わっている分野は保育や授業というささやかな分野であり、そこにアプローチするのに質的研究をやるしかないと考えてきた。

## 1 実践現場に関わる研究を進める

振り返ってみると、保育や授業の実践に関わる研究を始めたのは30年くらい前だと思う。30年くらい前に観察とメモ書きを始めたが、その研究成果をまとめて発表する場所がなかった。20代で始めて10数年、保育・授業への質的なアプローチの研究発表をすることはなく、並行して心理学のもう少しオーソドックスないわゆる量的な研究を発表してきた。やまだによる『教育心理学研究』に掲載された事例研究(山田, 1982)は画期的であり、その時、編集委員会にいたのだが、論文が通った時の興奮は今でもよく覚えている。

質的研究にはいろいろなアプローチがあるであろうが、保育・授業を研究している身からすると、どうやって保育現場、学校現場とつながっていくか、大学にいる研究者と現場にいる実践者がどうつながっていくか、そこに質的研究はどう役立ちうるかを主に考えている。簡単に言えば、質的研究を進めることで、研究の成果が現場の先生と共有できる情報になっていく。そういったことには、よい面もあり、悪い面もあろう。否定的に言えば、現場の先生は難しい研究のことなどわからないし、だからこそ有意を示す\*(アスタリスク)がちりばめられた、わからない論文を出すな、ということになるかもしれない。それ以上に、現場の中で大事である問題、現場の先生方が大事だと意識していること、またそうでないことについて、研究者が現場に入り込んでみると従来の学問では大事だとされていなかったことのなかに大事だと見えてくるものがある。そういう問題にアプローチする時、質的なやり方でとらえざるをえない。それを現場の先生に見せて共有して議論していく。書いた成果を現場の先生にチェックしてもらうことも大事だが、手順のことではなく、現場に行き観察したりインタビューしたりして見えることを現場の先生と話し合う。そして、現場の先生と話し合っていることをどう論文に載せていくかを思案する。そういうことを考えると、質的なアプローチに入らざるをえないのである。

## 2 正直である研究とは

狭い意味での心理学者やまた質的研究者であっても、そこに閉ざされずに現場領域に広がっていく時、改めて質的研究の疑わしい点を見直したいと思うことも出てくるのではないだろうか。質的研究の手法やアプローチは数多くあり、どれも洗練されてきたと思う。しかし、根本的に言うと質的研究に怪しいところは残る。いい加減なところがどうしても残るのである。そのいい加減なところを質的研究では隠しにくい。量的研究、実験的ないし統計的研究は、いい加減なところを隠しやすいということだと思ふのである。質問紙研究はなぜ「よいか」というと、そのいい加減なところが読み手にもわからないが、研究者にもわからず、「ない」ことにしやすい手法だからであろう。それに対して、質的研究はいい加減なところが、研究の過程ですぐには見えないにしても、わかったことを論文に書いてみるとよく見える。日本語で経緯を丁寧に書いてあるからである。少なくとも量的な手法に安易に頼った心理学や教育学の研究に見られる不可避的ないい加減さではない。

その点、質的研究は結構正直な手法であるのではないかと思う。これだけ正しいことがわかっていると、素人を脅すかのごとくに権威的に振る舞う時には具合悪いのだが、その方が専門家以外と連携する時にはよいのではないか。正直であることはいいのだが、もちろん、正直であればあるほど批判も増える。「この程度の話でどうしてそういう結論が出るのか」「数人に聞いてどうして結論が言えるのか」という批判は当然出てくる。数個のエピソードでものを言ったりしていると批判を受けやすくなる。しかしそういったことは、眉に十分唾をつけていただくことで結構ではないかと思っているわけである。

## 3 現場に依存しつつ研究を進める

私の立場から見る質的研究の一つは相当に現場依存になる。幼稚園でも保育園でも小学校でも、その場面をよく知っている人たちに通用する取り組み方や記述の仕方になっている。そのよさは現場にかかわって

いる人に通用しやすい。福祉や看護学の一部もそうだと思うが、同じ質的研究と言っても、保育・授業の研究は、対象者ないし研究協力者は子どもと同時に先生方である。先生方は全くの素人ではない。独自の用語と体系を長年の伝統の中で開発し、研究者の考え方は違ふだろうが、日々実践しているだけではなく、実践について振り返っている人たちである。そういう人たちのある種の言い回しや考え方が、現場記述の中に入ってくる。そのことのよさは、ある程度話が通じるようになる点にある。問題点は、現場の先生が書くものと研究者の記述の違いはどこにあるのか、研究者独自の役割や機能はどこにあるのかが曖昧になることである。しかし現場の先生たちのやっていることとのつながりを維持せざるをえない。

研究を進める上での第二番のポイントは内容依存性であることである。私自身、年々、そういう内容に入り込むようになってきている。心理学といっても発達心理学の場合、例えば、幼稚園で子どもの観察をする時、さらに5歳の子どもの相互作用として取り出していく時、それがどこで起こっているか、どういう場面なのかをなるべく問わないで「5歳児とは」ということを伝統的に検討し、結論づけてきた。それを「場」とか「内容」を組み入れて考えていくようにするのである。それは幼児教育で言えば、そこでの発想が保育内容とどうつながっているか、またそこで先生はどういう指導を心掛けているかということを考えながら記述せざるをえなくなるということである。

## 4 研究者と実践者の共同研究

研究を進める上でのもう一つのポイントは、研究者と現場の先生方との共同作業をどう進めていくかである。研究協力者との関係で、質的研究においては相互主体的に共同してやっていく、とよく言われる。あれはきれいごとであり、そんなにうまくいくはずがないと思う。私と特定の幼稚園の先生が一緒にやって対等かというところと難しいところがある。多くの幼稚園の先生は私と対等にやっているとは思わない。現実にはもっと複雑な関係もある。なかには「観察をさせてあげる」という場合もある。研究者が偉くて、実践者が下にある場合もあるし、もっと複雑な関係もある。そこで何

らかの意味で協力的関係をつくり、共同作業を進める。それは、相当に複雑でダイナミックな関係を持っていて、その経緯を全部論文に書くべきであるという立場もあるが、ほとんど書かない場合もある。論文に特定の場について表現するかどうかは確かに難しいのだが、研究過程としては、そのことを真剣に受け止めざるをえないと思うのである。

## 5 研究成果として何を提出していくか

研究論文を書いていく中で、それを通して結果的に何が成果として出てくるか。質的研究で確定的なことを言うことは難しい。心理学全体にとってもそれはそもそも難しいことかもしれないが、質的研究にとってはとりわけそれは著しいことである。研究成果からある種の普遍性を主張することも難しい。さらに言えば、特定のフィールドには当てはまる事例としての確かさを強く主張することも難しいと思う。

研究はそれを通して何を出していくか。さまざまな事柄の吟味を行うものだと考えてみたらどうかと思う。どういう吟味が可能であろうか。一つは「概念の吟味」ができる。私自身が意識しているのは二重の概念の吟味である。一つは心理学で使う概念が現場で観察した時にどういう具体的な意味合いかを吟味する。もう一つは、現場の概念の検討である。保育・教育の分野は実践側における専門用語が氾濫している。行政用語があったり、現場の先生がつくりだしたものがあったりして、複雑である。その内実つまりそこで意味されていることも曖昧であり、かつ流動的である。実際に則した時、どういう形で概念が使われ、意味し、指示するかが検討できるのではない。

狭い分野の研究について考えているだけではなく、質的研究を読んだり、審査せざるをえないので、その中で質的な立場の論文を読むことが多い。その際、この概念の検討があるかどうかを質的研究という論文が持っているよさを考える時の重要な要因にしている。その論文を通して既成の概念の何が吟味され、再検討されるか。その結果、「違う」「それでよいのだ」ということや、その意味を精密化するということが出来るはずである。

もう一つの吟味の過程は「場」についてである。対

象としている場があるわけだが、場の現状をどう吟味していくか。特定の幼稚園があり、その幼稚園なりの保育があり、遊びが日々実践されている。特定の小学校の授業についてもそのやり方にはさまざまな現状があるが、それを吟味しうるかどうか。吟味は批判することとは違うので、ネガティブな面も見られるかもしれないし、褒め肯定することもある。大事なことは肯定とか否定自体ではなく、現状が見えてくるような資料になっているかどうかである。その結果として現状を吟味するという事は、現状をよく見えるようにすることだけでなく、見えることを通して現状をよくしていくことができるかということでもある。実践に関わる研究者として短期的にも長期的にも現場を改善できるかどうかが一番の研究の価値を置く。なにより一般論ではなく、自分自身としてそう考えたい。現状を見直すきっかけとして研究を進めたいということである。

吟味としての3番目は、研究者と実践者、自分と相手の関係を検討することである。私自身は論文に自分のかかわり方を詳細に書くのは好ましいと思わないので、自分がどこにどうかかわったか、データ記述として示したことのどこにいるかはなるべく消している。できる限り固有名詞を書かないで、AとかBと書く。しかし、実際の研究の過程では、特定の家庭や特定の幼稚園や小学校とその先生や親とかかわらざるをえない。そこでどういう関係をつくっていくか。結果的には一期一会の独自のことが起こる。それを通して相手はどう変わるかわからないが、自分の方に何か変化することが起こるわけである。出会いといってもよい。そういうことも研究することの一つのポイントではないかと思うのである。

## 6 結論的に

指摘したいことは、質的研究をすることが研究者と実践者との関係、研究の場と実践の場の関係、狭い心理学と他の学問との関係を作り替えていきやすいのではないかということである。量的研究でもできないことはない。私自身の実際の時間の4分の3は量的研究が占めていて、その方が多いわけだが、研究を進めてきて、一人ひとりの実践者との関係の中にあっては、先ほど指摘してきたことを考える上では質的研究が大

事だし、有効であると経験的に感じてきた。そのことが質的研究全体にあてはまるか。また、質的研究者・質的心理学者の全員にあてはまるか。おそらく当てはまらないと思うのだが、ある種のタイプの質的研究においては今のような問題は繰り返し出てくるし、実際に研究する中で、そういう問題に出会わざるをえないのではないだろうか。そう考えて、あえて私のささやかな経験を整理して述べたのである。

#### 4 「質的心理学」は心理学以外を排除するための名称ではない

— サトウタツヤ (立命館大学)

##### 1 はじめに

日本質的心理学会ができた。あるいは誰かが作った。なぜ質的心理学会なのか、特に何で「心理学」なのか、という疑問を持つ人は多いだろう。これにはもちろん事情、経緯がある。そして心理学以外を排除するのではない。

私ごとではあるが、私に対して、専門は何ですか？と尋ねる人が多い。「ホントっぽいウソ」とか「普及」と応えることにしている。ものごとはどう広がっていくか、知識はどう広がっていくかということが研究の基本になっている。個人的には、心理学こそウソっぽいものの最たるものなので、その普及過程である心理学史をやっているということになる。卒業論文は育児の悩み、修士論文は育児ストレス。お母さんの育児の悩みをKJ法でまとめたのが卒論で、その後ストレスと抑鬱との関係を相関研究でみたのが修論。その後、量的研究に幻滅し、なんで心理学がこんなことになってきたのか、を調べようとして心理学史に踏み込み、それが博士論文になった。この10年間は(時間的には)心理学史をやっていた時間が長いわけだが、その裏では量的でない研究をどうすればいいかということに関心があった。もともとの個人的な問題意識は、方法論が研究を制限しているということにあった。つまり、方法論の制限が研究対象の制限に直結しているのが非常に不満で、「おもしろい研究」をやるために

は方法論も整備する必要があると考えるようになっていたのである。これがやまださんや南さんと引き合うきっかけで、その後の一連の流れのささやかなきっかけの1つでもあったと思われる。

##### 2 質的研究とは何か

では、ここでいう質的研究とは何か。簡単に見ておこう。

まず「質的な経験」ということを考えてみよう。既に『心理学の新しい形』などで書いたことと重なるが(佐藤, 2002; 2004), ここでも詩人・高村光太郎の妻の智恵子にご登場願おう。彼女は「本当の空がある」と言った。

この「本当の空」とは何なのだろうか。空の問題なのか、言った人の問題なのか、といえばモチロン後者の問題である。では、この経験に迫るにはどうすればいいだろうか。

その当時のその場所の空の状況を再現してみても分かることは少ない。そうではなく、彼女の状況や状態など様々な情報を利用して再現していく必要がある。生まれ故郷の福島県の二本松で言った「本当の空」の意味はそうしなければ分からないのである。

質的研究とは何かということについて、能智(2001)は「扱われるデータと結果の表示が質的であること」としている。多くの場合、言葉で表現されたものを質的研究とすることになるが、澤田・南(2001)のように「言葉に限定せず、図や映像、音声など、事物も出来事の様態を写したり記したりしたもの全般」とする立場もある。

質的研究の具体的な特徴については、澤田・南(2001)及び能智(2001)が表2のように整理している。

こうした研究手法には批判も多く寄せられている。しかし今ここでこれらの説明及びそれへの批判、そして再批判をとりあげることはせず、話を次に進めていく(関心のある方はサトウ(2004)の2~3節「質的研究への批判に答える」を参照されたい)。

ではなぜ、質的研究への志向が近年高まりつつあるのか。それはいくつもの理由があるだろうが、色々な現場において、生身の人間とのかかわりが重視され、



表2 質的研究の特徴(澤田・南, 2001; 能智, 2001)

澤田・南 (2001)	能智 (2001)
帰納的	自然な状況でのデータ収集
対象となる事態と人々を全体的に見ていく	プロセスに対する注目
研究者自身が対象に与える影響に敏感である	帰納的な分析
対象者の視点から相手を理解しようと努める	意味への関心
研究者の信念, 視点, 事前の前提をいったん保留する	

また, そうした関わりをもとに学問を構築していくことの重要性が認識されたからであろう。医療, 看護, 教育, 福祉, 犯罪, 司法において人間関係が重視されるようになってきた。こうした領域は従来, 人間の理解は付随的であるか無関係なものとされていた。医療は病を治すことこそが求められており, それに応えるのが基本であるから, そこに人間関係を見たりする必要はないとされていたのである。看護も同様であっただろう。教育はどうだろうか。そこでも教える内容(具体的な教科)の方が重視されており, さらに教育法制や教育理念が(教師と子どもとの関わりよりも)重視されていたと言えるのである。

一方でこれらの領域は心理学からみると応用領域にしか見えてこなかった。看護心理学, などという言葉は心理学の端っこの方, というイメージしかないだろう。犯罪心理, となるとそこには「カッコいい」というイメージが生まれるかもしれないが, いずれにせよ応用的で低い価値しか与えられなかった。しかしそういった場における研究からも, 人間の本質を知るようなことが分かってくる。これは後でモード論について紹介するときにも出てくる話だが, いわゆる「応用領域」だからといって応用的なことばかりになるわけではなく, むしろ基礎的な部分に行き着くことがある。

一例として, 供述分析ということを取り上げる。浜田寿美男が行っている一連の虚偽自白の研究からは「悲しい嘘」という概念が析出されている(浜田, 1992 など)といった, 自分に不利なウソをつくということがありえるのか? たとえば自分の子どもをかばうというような場合ならありえると想像できるだろ

う。しかし, そういう条件もなしに, 「私が誰かを殺しました」などということがありえるだろうか? 死刑その他の刑罰を受けるようなことを人は虚偽で自白するのだろうか? こうした疑問をもつのはもっともである。だが, 現実には, 真犯人が後に名乗り出て結果的にえん罪だったというような事件はある。その場合, 虚偽自白をしてしまった人は「心の弱い人でもないヤツ」なのだろうか。そういうことはないのである。まずこうしたことが起きるのは「過酷な取調べの状態の中で今のしんどさから逃れよう」とするためである。また, 「自分はやっておらず, 本当は無実なのだから, 公正な裁判制度のもとで罰せられることはないだろう」などと考えてしまうからである(裁判が公正かどうかはその後に身をもって体験することになるのだが)。ある条件でしか起きないようなことであっても, 丁寧な分析をすることによって「悲しい嘘」というような概念が形成され, それは人間の生活や本質に関する様々なことを見直すように気づかせてくれるものである。

### 3 Clinical 的にやろう。あるいは clinical に新しい訳を

心理学はなぜこうした質的研究を実行するのが難しいのか? もちろん心理学だけの話ではない。これを問うのは心理学史の課題であろう。しかしここでは, むしろ難しいのではなく, 実際に行われていることが見えにくくなっているのではないか, という問題設定を試みたい。そしてここでは「clinical」ということ

に光をあててみる。現在では「臨床」と訳す語である。clinical な psychology といえば、今の語で訳せば臨床心理学であろう。そして、その意味はセラピーとか心理療法とか行動療法とか、そういうイメージ、つまり人を治す（もしくは癒す？）技術に関する心理学ということになっていると思われる。

しかし「clinical」は「臨床」だろうか？ それだけを意味するのだろうか？ おそらく、そのように固定的に考えることが、心理学における豊かな質的研究の伝統を無視することにつながりかねないのだ。

「clinical」は「臨床」ではない。心理学史上で最初のクリニカル・サイコジスト (clinical psychologist) と呼ばれる心理学者・ウィトマーは雑誌『サイコロジカル・クリニック (Psychological Clinic)』の最初の論文で、なぜ自分の心理学が clinical を標榜するのか、ということについて説明を行っている (Witmer, 1907)。それによれば、医学においてさえも clinical は単に場所を示す言葉ではなく、それ以前の哲学的、説教的な医学から脱却するための方法を示していた。医学においてさえ目の前の患者さんではなく聖書などの文献を読んで解釈して治療する、ということをしてきた時代があったことを意味する。聖書にはあらゆる病気について書いてあるはずであり、それをどう探して読み解くかが大事であって、読解ができないのは勉強不足（そして信仰不足）だという感じである。そうではなく、患者さんをみましよう、ベッドサイドでみましよう、ということで clinical が大事だということになったのである。それが最初に実現したのが医学だったということである。それはおそらくたくさんの患者と接する中で、患者を見る（診る）ことの重要性が、関係する人々に共有されていったからであろう（心理学の場合、聖書を読んで解釈して、ということはないだろうが、「実験計画法の本を読んで P の値（統計的検定の危険率）を見る」ことが実際の人間を見るよりも重視されていた、という表現になれば、それほど違いは無いように思える、と言ったら皮肉にすぎるだろうか）。

医学における clinical は単に場所のことを言っていたわけではなく、方法論全体の改革を含意していたのである。20 世紀の初頭、心理学においてもそのようなことをしていくべきだとウィトマーは考えた。ベッ

ドサイドに臨むということの意味していたわけではなく、実地・現場を大切にしようということである。訳語について、医学だったら臨床のままでいいけれど、他の分野であればそれぞれ訳しわけてもいいのではないだろうか。心理学であれば「臨人」だし、看護であれば「臨床」、社会学だったら「臨場」になってもいいのではないだろうか。

そして、それぞれの学範（ディシプリン）において clinical の意味を考えて研究していくことが質的研究の一つのバックグラウンドになりえるだろう。Clinical な心理学をいわゆる臨床心理学領域に閉じこめなければ、ピネ、ヴィゴツキー、ピアジェといった豊かな知的伝統を心理学のメインストリームに位置づけることも可能になる。ここでこれらの伝統について詳述することはしない。むしろ強調したいことはこうした心理学のあり方が「傍流」に見えてしまうことの危険性・不毛性、「発達心理学のことであって心理学全体ではないでしょ」という解釈に追い込まれてしまうことの危険性・不毛性なのである。そしてこうした危険性・不毛性は、心理学だけでなく他の学範でも起きているのかもしれないのである（いわゆる現業軽視・現場軽視という形である）。

#### 4 質的研究は大変だ

もちろん、質的研究の実行が難しいのは見方の問題だけではない。つまり、Clinical という概念の意味を見誤ったから、というような見方の問題だけではない。本質的な難しさというものがある。現場に近い人でも、すべての現場経験が質的研究になるわけではない。むしろ話は逆で、現場で何かをしていけば質的研究になるわけではない。それなりの苦労や工夫が必要である。苦労や工夫は方法論ということになり、そのことを知りたい人は多いだろうが、それは今後の学会活動に期待してもらうことにして、ここでは、メタ的な議論を試みたい。それは、良い研究とは何か、というようなことであるが、一歩進めれば、良さを評価する基準とは何か、という話である。

質的研究による論文は——現状では——各学範の主要な学術誌に掲載を認められることは難しい。しかし、掲載が認められない論文は悪い論文なのだろうか。そ

表3 学界における様々な評価 (佐藤, 1997 を参考にした)

- |   |              |
|---|--------------|
| 1 | 学業論文 (卒論・修論) |
| 2 | 学会発表         |
| 3 | 論文査読         |
| 4 | 被引用          |
| 5 | 学位 (博士号)     |
| 6 | 就職           |
| 7 | 学会賞          |
| 8 | 冠名現象         |

んなことはないだろう。むしろ、評価とは何かを考えなければいけないのである。したがって評価の方法それ自体についての検討が重要となる。これは科学社会学という分野の研究になるが、佐藤 (1997) は学問における評価について、様々な段階を示している (表3)。

人が学界に身を投じた場合、おおむねこのような評価に身をさらすことを意味する。これらの評価について、人によっては順序が異なる場合もあるが、一般的には数字の順番に評価を経験することになる。論文が査読されて掲載されるのも評価だし、論文が引用されることも評価の一種である (引用された論文は良い論文として評価されているということを含意する)。最後の冠名現象とは、人名の業績化として知られる現象で、たとえば物理の単位に人の名前が冠されるようなことをいう。マッハという単位は、マッハという実在の科学者の業績を称える意味で人名が単位に使用されるようになったのである。心理学では単位にまつわる冠名語句はないが、スキナー箱と言った場合には、冠名現象である (もちろん、スキナー自身はスキナー箱とは呼んでいなかった)。

論文査読を評価という文脈に位置づけた場合には、それは単に評価の一つの段階にすぎない面がある。しかし、その意味するところは重大で、論文が雑誌に載るかどうかが極めて大きな影響を (特に若い著者に) 与えることになる。その際、査読の結果、落とされてしまった論文は悪い論文なのか、という議論が成り立ちうる。「いい研究は質的研究であっても量的研究であっても『心理学研究』や『教育心理学研究』という雑誌に載っている」という議論がある。載らないのは

だめな研究なのだ、という話である。実際最近の『教育心理学研究』には質的研究も掲載されるようになってきた。しかし、学術誌に載った研究が良いということは、落とされた研究が悪い研究だということの意味しない。論文の評価は評価軸とは無関係になされない。評価結果を論文それ自体にだけ帰することはできない。むしろ、評価軸とのインタラクション (相互作用) である。ここで問題になるのは、評価軸が一つしか無い場合と、複数の評価軸が相関してしまっている場合。量的研究のみを評価する軸が設定されている場合には、質的研究の中で「量的研究にも評価されやすいタイプの研究」が評価されやすくなる。本来、量的研究では評価されないけれど、質的研究としては良い、というような研究を評価することができなければいけないのだ。従って、評価軸が複数あることが必要となる。しかし、その場合に気をつける必要があるのは、2つの評価軸がそれぞれ自体相関してしまっているという問題である。それをどう防ぐかを考える必要がある。『質的心理学研究』という雑誌の創刊は、それ自体が新しい評価軸の設定を目指したものであり、質的研究独自の評価を行うことを目指す。もちろん、「量的研究としても良い質的研究」と「量的研究としては良くないが質的研究としては良い研究」の両者を評価する、という意味である。

ただしここにも留意すべきことがある。それは、評価軸を増やせば増やすほど人は管理され、寂しい気持ちになることがあるということだ。つまり、評価軸を複数作ると、どちらでも評価されない論文が出てくる、という副作用があるのである。その意味で編集委員会や査読委員は「だめなものはだめ」ときちんと明言す

る責任をとらないといけなくなる。そうした責任をも包括した上で、質的研究の評価をしていく必要がある。質的研究への理解はまだまだ浅く、さまざまな学界で理不尽な査読が無いとはいえない。『質的心理学研究』はそうしたことに対する異議申し立てなのである。

## 5 学術誌から学会へ

日本質的心理学学会が始まったのは『質的心理学研究』という雑誌が創刊されたことに直接の原因があると見るのが妥当である。その『質的心理学研究』は、創刊号出版前にはどうなることかと不安であったが、結果的には好評をもって迎えられた。心理学のみならず看護学や教育学など関連領域にも読者を得ることができたのである。そこで読者を中心としたアソシエーションを作ろうということになって、今回成立したのが日本質的心理学学会なのである。学会が先に出来てから学術誌が発刊されるという方が自然だと思う人もいるだろうが、歴史は必ずしもそのような見方を支持しない。具体的に、日本心理学会は学会誌『心理学研究』の方が先にできた。『教育心理学研究』も同様に、まず学術誌を発行する団体として日本教育心理学協会が設立され、その後、学会ができたのである。どのような分野でも最初は他領域の雑誌の中で論文を発表している。しかし、研究者が増えると独自の論文発表の場を求めるようになるのである。最近の日本では学会ができて学術誌という方がスタンダードに思うかもしれないが、そうではなく研究する人たちが増えて必要な学術誌（ジャーナル）ができて、学会になることは自然な成り行きなのである。

しかし、ここで一つ問題になったのは学会名称である。日本質的心理学学会という名前だと心理学以外の人に魅力的でなくなってしまうかもしれない、という恐れは確かにあった。だが、既に述べたように今回の学会は『質的心理学研究』がその発祥母体と言えるのであり、少なくともその雑誌は続けていかざるを得ない。やっと認知されてきた雑誌名をわずか数年で変えることは危険である。『質的心理学研究』が残るのであれば、日本質的心理学学会という名称は最善ではないとしても悪くない選択であろう。また、『質的心理学研究』の読者並びに投稿者は狭義の心理学者ではないこ

とも重要である。名称よりも実質的機能が果たされていると考えることもできるからである。『質的心理学研究』の読者は、もちろん、この新しい学会に集って新しいうねりを共に作ってほしいと願いたい。名称問題は近い将来に検討すべき問題として残しておく。

名称より、実質に学融の輪を作っていくこと、人々が集まる場を提供することが重要だろう。たとえば、受話器というものは、電話機が出来た頃の、受話機と送話機が分かれていた時代の呼び方の名残である。現在では受話機と呼ぶべきものなのである。しかし、今では受話器と呼んでいて特に問題はない。受話器で受話だけしている人はいないはずである。

名称に心理学があるからと言って心理学で閉じる必要はなく、むしろ、学融を推進していく必要があるのである。

## 6 学融とは何か？

言うまでもないことだが、心理学だけが質的研究をやっているわけではない。様々な学範（ディシプリン）と学融を目指していくべきだ。これは掛け声としては正しいが、このことについて考えたり研究したりすることはほとんどない。ちなみに学融という言葉は、trans-disciplinarity の訳であり、“trans “を「融」と訳そうと提唱している。

学融と似た言葉に学際がある。つまり、「融」ではなく「際」があるが、この場合には inter の訳として「際」が用いられることが多い。inter disciplinary は学際的で trans disciplinary は学融的、それぞれ違うことを言っている。心理学の用語に関しては、私自身、trans-personal とか trans-action についてその意味がよくわからず難渋したことがあるが（特に interaction と transaction の違いなど、ある訳では前者が相互作用、後者は相互相乗作用となっていた）、trans を融合という意味にとることで見えてくることがある。母子インタラクションと母子トランザクションでは前者がやりとりのなもの、後者は融合的なもの、として理解すべきなのであろう。ちなみにアメリカで trans personal なんて言わなければいけないのは、個がしっかりしているからこそ。パーソンがしっかりしているから融合を

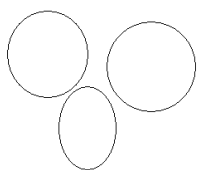
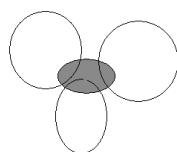


図6 (1) 学融前のイメージ



(2) 学融のイメージ

わざわざ言わなければいけない。日本でそんなこと言う必要はないということもわかってくる。ついでに *inter national* は国際と訳される、つまり国の際（きわ）ということ。国際博覧会や国際連合もそういう発想。今後は *inter national* から *trans national* へと進んでいくべきだろう。

では質的心理学会は「際」ではなく「融」を目指していると言えるのか。心理学と明示しているのだから、むしろ心理学というタコ壺の中に入ろうとしているのではないか、という疑念はもつともなものだと言える。この問いに答える前に、学問の融合についての理論、モード論を紹介しておく（ギボンズ、1997；小林、1996；サトウ、2001）。モード論によれば、学際の問題の共有、学融は解決の共有が目指されるという。また、学融の前提として、他の分野と融合するには自分の分野について確立している必要があるというのである。

質的心理学会において、解決の共有とは何を意味するのか。質的研究による人間理解の促進、これが問題解決になる。なぜ問題解決になるか。それぞれ規範、学範、ディシプリンにおいてうまくいっていないからである。うまくいっていないことをうまくやるようにする、それが一つの解決ということになる。それぞれの学範によってその目標は異なって当然である。社会学、心理学、看護学、精神医学、とそれぞれに全然違う目的があるので、そこまで縛ることはできない。しかし、質的な研究のやり方や、そしてもっと大事なことだが、評価のされ方で苦しんでいる。そこには解決されるべき問題があると言えるだろう。だからこそ有効な課題解決ができないかということが、質的心理学会での大きな共有点になると（少なくとも私個人には）思われ

る。また、こうした論点から言えば、評価のされ方で苦しんでいる部分については『質的心理学研究』の創刊によって現実的な解決がなされ始めていると言え、今後はさらに質的研究のやり方の内実について進展させることが望まれるのである。

さて、人や学問が混じる時、心理学でも社会学でも看護学でも人類学でも言語学とか何でもいいのだが、私のイメージは、皆が真ん中に集まってこいよということではなく、真ん中に輪を描いてみたら交わるのではないかと考える。図6で言うと、左のイメージでなく右のイメージである。

その時の相互理解のために必要なのは、相手がおかれている文脈や抱えている複雑性のようなもの。心理学にせよ看護学にせよ、単純なものではない。外からみれば一枚岩のように見えても、そうではない。心理学には心理学の苦勞がある、至上命題もある。他の学問も同様。それがちゃんとわかった上で交点をつくっていこう。ハンドブック『政治心理学』（河田・荒木、2003）という本は政治学者と心理学者が書いている本だが、そこには「心理学者——略——は、外的妥当性を犠牲にしてまで因果的な正確さを買おうとする」という指摘がある。心理学者たちは現実にあるかないかより、因果を正しく推定できるかの方を重視しており、因果が正しく分かれば、それが現実的に意味があるかはあまり重視しない、と指摘されているのである。この指摘が正しいかどうかはともかく、心理学者はおそらく苦勞をせざるをえないだろう。正しいとは言えないが間違っていないとも言えない、そういう指摘である。そして心理学者は質的研究をしようとしても、自分たちが受けた訓練が、質的研究が求めるものと相反している面もあるのでやはり苦しいのである（ただ、

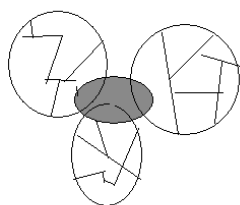


図7 学融後のイメージ（相手の背景を知る）

実際に心理学が質的研究と相反していたのか、というのは心理学史の課題であり、実際にはそうではなかった。心理学史のある時期以降に過度の実験化が進んでいたのである)。

質的研究をやろうとしてもそれほど単純にできるわけではない。それぞれの学範で育った研究者は、それぞれの背中にいろいろなものを背負っているのである。看護の人は命の尊重とかクライアントの尊重、あるいは、良くも悪くも医療の中の看護のスタンス、とかがある。先ほどの右の図は円がのっぺりして一様に描かれていたが、実際にはその内部は複雑なのである(図7)。お互いにそうした背景を理解した上で、先ほどの図6の右図でいうと真ん中の円に集まるべきなのである。

## 7 質的研究をより推進していく場としての学会

この日本質的心理学会は、学術誌という場から発生した。したがって、学術誌を中心にしたコミュニティは既にできつつある。しかし、論文を書いたり読んだりするだけではなく、実際に集まることも重要である。集まるといえばやはり学会の大会である。そこで最後にそれについてコメントをして発表を終えたい。最初の数回は記念大会的な学会であり、個別発表は無いが、いずれ会員の学術発表の場として機能していくことが望まれる。その際にどうするか。まずポスターか口頭か、という分かれ目もあるが、ここでは口頭発表について言いたい。それは、口頭発表をあまり細分化しない、ということである。仮に多くのセッションを走ら

せるとすると、看護系、心理系、のように別れてしまうことが懸念される。そうすると、学融が促進されにくい。できれば学会発表では1セッションにして、皆で共有できるようにするのがいい。実際、私が参加している法と心理学会では、口頭発表についてはセッションを分けない。もし分けたら「法学的」な法と心理学研究と「心理学的」法と心理学会研究に分かれるのは明らか。そうなってしまったら意味がない。無理やりにも場と時間を共有することが重要。法と心理学会におけるこうした試みは、各会員の中にポディブローのように効いてきており、相互の理解も促進されている。もちろん、ポスター発表の場合も、セッションを分けなくて融合的にやる方がいいように思える。

さて、場所のことはともかくとして、私たちはどのような融合を目指していくべきか。その一つはやはり論文化をお互いに支え合うということであろう。(法学など一部の分野を除けば)日本の多くの学会において学会発表は自発参加型であり、誰でも発表できる。しかも審査など無いから多少内容が違って大丈夫だし、一連研究の最初をA学会、その2をB学会というように分けることもできる。統計を取ってみれば分かることだが、普通の学会では毎年の総会や大会において、学会員の約3分の1が発表をしている。ところが論文掲載となると、がたっと減る。学会員の1割程度しか載せられない。発表と論文に差がある。学会発表と論文掲載には大きな断絶があることが分かる。だからこそ、そこを埋めることをこの学会でもしていったらいいのではないだろうか。ワークショップの開催などを積極的に行っていく必要があるだろう。

## 8 おわりに

以上、『質的心理学研究』という雑誌を前提としてできた日本質的心理学会がより大きなうねりを作っていくように、心理学に限るわけではない、ということを経験科学的理論も援用しながら論じてみた。変なめぐりあわせで、私は学会事務局をつかさどる役というバックヤード(裏方)の役になったので、この機会にいろいろと説明したり提案したりした、という位置づけで本稿が読まれれば幸いである。

## 5 まとめ

以上、質的研究が切り開く地平について、異なる視点から3人の意見がまとめられている。3人の著者による内容の重なりや異なる見解は、それが質的研究にとって重要な論点であることを示唆するものとして受け取っていただき、様々な角度からの読者の考察に役立てていただければ幸いである。

## 引用文献

- 会田雄二。(1972)。日本人の意識構造：風土・歴史・社会。東京：講談社。
- Fontana, A. & Frey, J.H. (2000)。The Interview: From Structured Questions to Negotiated Text. In Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (Eds.) *Handbook of Qualitative Research* (2nd ed.). (pp.645-672). Thousand Oaks, CA: Sage Publication.
- マイケル・ギボンス(編)。(1997)。現代社会と知の創造(小林他、訳)。東京：丸善。  
(*The New Production of Knowledge: the Dynamics of Science and Research in Contemporary Societies*. (1994). Thousand Oaks, CA: Sage Publication.)
- 浜田寿美男。(1992)。自白の研究。京都：三一書房。
- 河田潤一・荒木義修(編)。(2003)。ハンドブック：政治心理学。東京：北樹出版。
- 小林信一。(1996)。モード論と科学技術の脱・制度化。現代思想, 24(6), 254-264。
- Miles, M.B. & Huberman, A.M. (Eds.). (1994)。*Qualitative Data Analysis: An Expanded Sourcebook* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- Morse, Janice M. (Ed.). (1994)。*Critical Issues in*

*Qualitative Research*. Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.

- 能智正博。(2001)。質的研究。下山晴彦・丹野義彦(編), 臨床心理学研究(講座臨床心理学第2巻)。東京：東京大出版会。
- 大谷 尚。(1995a)。コンピュータを用いた授業を対象とする質的研究の試み, 日本教育工学雑誌, 18(3/4), pp.189-197。
- 大谷 尚。(1995b)。質的アプローチが教育工学において目指すもの, 日本教育工学会第11回大会講演論文集,(パネル討論「人間の学習活動改善を目指す教育工学の在り方」) pp.11-14。
- 大谷 尚。(1997)。質的研究法による授業研究：教育学・教育工学・心理学からのアプローチ。(共著：平山満義編)(担当「教育工学からみた質的授業研究」) pp.123-181。京都：北大路書房。
- 佐藤達哉。(1997)。評価と褒賞。佐藤達哉・溝口 元(編), 通史 日本の心理学(第5部3章, pp.473-496)。京都：北大路書房。
- 佐藤達哉。(2002)。モードⅡ・現場心理学・質的研究：心理学や教育心理学にとっての起爆力。下山晴彦・子安(編), 心理学の新しいかたち(pp.173-212)。東京：誠信書房。
- サトウタツヤ。(2001)。モード論：その意義と対人援助科学領域への拡張。立命館人間科学研究, 2, 3-9。  
[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hs/ningen/NINGEN\\_2/003-009sato.pdf](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hs/ningen/NINGEN_2/003-009sato.pdf)
- サトウタツヤ。(2004)。心理学からみた質的研究, 学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ(立命館大学), 7, 3-43。  
[http://www.human.ritsumei.ac.jp/project/archive/series/no7/7\\_3.pdf](http://www.human.ritsumei.ac.jp/project/archive/series/no7/7_3.pdf)
- 澤田英三・南博文。(2001)。質的調査：観察・面接・フィールドワーク。南風原朝和・市川伸一・下山晴彦(編), 心理学研究法入門：調査・実験から実践まで(pp.19-62)。東京：東京大出版会。
- アントワヌ・サン＝テグジュペリ。(1962)。星の王子さま(内藤濯、訳)。東京：岩波書店。
- Witmer, L. (1907)。Clinical Psychology. *Psychological Clinic*, 1, 1-9。
- Wolcott, H.F. (1992)。Posturing in qualitative research. In M.D. LeCompte, W.L. Millroy, & J. Preissle (Eds.), *The Handbook of Qualitative Research in Education* (pp.3-52). New York: Academic Press.
- 山田洋子。(1982)。0～2歳における要求：拒否と自己の発達。教育心理学研究, 30, 128-138。

(2004.10.19 受稿, 2004.10.26 受理)